

# 中学校における歴史人物学習の可能性

— 教科書分析と授業開発を手がかりに —

竹 中 伸 夫\*

## The Possibility of History Education Taking up the Person in the Past in Junior High School

— Based on the analysis of textbooks in England and on the development of lessons —

Nobuo TAKENAKA

### Abstract

The aim of this study is to inquire the possibility of History Education taking up the person in the past in junior high school in the based on the analysis of textbooks in England and on the development of lessons.

Consequently, I explained a method defined the learning by reevaluating the person in the past, and made the four prefectures of this method differed from a method by sympathizing clear by the analysis of textbooks in England. And I developed the lessons accepted the four prefectures, "Tsunayosi Tokugawa - Is he the fifth Tokugawa Shogun loved enthusiastically only the dog, or the politician promoting the principles of civilian government?".

### I. 問題の所在

本小論の目的は、中学校の歴史教育において、歴史上の人物を扱うこと（以下、歴史人物学習と呼ぶ）の可能性を論じるものであり、高等学校段階を対象とした先の論文<sup>1)</sup>の継続研究ともいえる。

そもそも、現行の学習指導要領によれば、小学校の場合、例えば小学6年においては、国家や社会の発展に大きな働きをした先人の業績について興味・関心と理解を深めることを目標とし、42人の具体的な人物が上げられている<sup>2)</sup>。また中学校の場合、国家・社会及び文化の発展や人々の生活の向上に尽くした歴史上の人物を理解・尊重することが目標としてあげられ、「歴史のとらえ方」において、歴史上の人物や出来事などについて調べる活動が導入単元として設定されている。この時人物に対する興味・関心を育て、それぞれの人物が果たした役割や生き方について時代的背景と関連付けて考察することも求めている<sup>3)</sup>。

このようにして見てみると、学習指導要領を見る限り（無論授業レベルでは、さまざまな実践<sup>4)</sup>がなされているのではあろうが）、その時代や地域との関連において理解させるか否かに差はあるが、いず

れも、我が国や地域の歴史において優れた業績をのこした偉人を共感的に取り上げ、その業績によって自らの属する国家・社会の発展が結実したことを学ばせ、偉人、ひいては国家・社会に愛着を持たせることを目的とした学習となっているとまとめられる。

確かに、歴史上の人物を教材として取り上げるといことは、歴史の主体を通して歴史事象を学ばせるのであるから、単なる歴史上の事件を取り上げるよりも感情移入しやすく、共感的に取り上げ易くなる。そのため、上記のような学習になる可能性が高いことは否めない。しかし果たして、歴史学習において歴史上の人物を取り上げる場合、この方略しかなく、小学校と中学校において、そのような部分的な差異だけでよいのだろうか。

そのため本小論では、上記のような問題意識から、日本の中学校段階に相当するイングランドのKS3（11～14歳）の学生を対象とした歴史上の人物を取り上げた教科書シリーズを分析し、そこから得られた知見をもとに授業開発を行うことで、異なる歴史人物学習の方略を具体的に解明し、従来の共感型の歴史人物学習方略を反省的に吟味し、中学校段階における歴史人物学習の可能性を探ることを目的とする。

分析対象は、「歴史的評価」シリーズである。2003～2004年にかけてLongman社から出版された

\* 熊本大学教育学部社会科

全6巻のシリーズである。以下、Ⅱにおいて本シリーズにおける歴史人物学習の構造を解明する。そのためにまず(1)で、任意の1冊『血まみれメアリー：残虐な女王か敬虔なカトリックか』<sup>5)</sup>を手がかりにその学習の構造を明らかにし、続く(2)で全6冊においてどのような人物が取り上げられているのかを分析することとしたい。以上を踏まえて、Ⅲで授業開発を試みる。

## Ⅱ.「歴史的評価」シリーズにおける 歴史人物学習 —人物再評価学習としての歴史 人物学習—

### (1)学習の構造—常識的見方に反する共感—

『血まみれメアリー：残虐な女王か敬虔なカトリックか?』の記述を訳出し、その内容からKS3における人物学習の構造をまとめたものを表1として作成した。表中の「単元名」は訳出により、それ以外は筆者の分析による。以下、表1に基づき考察を行う。

表1より、本教材は、大きくは4つの部分に分けることができ、全体として、メアリーI世を擁護し、再評価する構成となっていることがわかる。

具体的には、まず第1の部分にあたる「導入」で、メアリーI世について、死亡日が祝日として200年にわたって祝われ続け、「血まみれメアリー」と評されるほど嫌われていたことが指摘される。そしてなぜ、このように嫌われているのか考えてみてほしい、と問題提起がなされる。そして第4の部分にあたる、最終単元「決めましょう—残虐な女王か良きカトリックか」において、異なる評価(解釈)が可能な彼女に関し、自分なりの解釈をすることが求められている。この最初と最後の部分だけを見ると、自分なりに評価する学習ではあるが、冒頭で指摘したようにメアリーI世を擁護し再評価する構成となっている、とはいえない。注目すべきはその間に挟まれた第2と第3の部分である。

第2の部分は、小単元「概観：王位の継承者」から「カレーでの敗北」までが相当する。ここでは、メアリーI世の幼少期から、死の直前までの出来事が、年代順に説明される構成となっている。

まず、幼少期から即位までにおいては、父により母を奪われ、自身も庶子として遇されたこと、結果的に父に男子が一人しか生まれず、長じて復讐するも、即位した弟にプロテスタントへの改宗を求められるも拒否したこと、そして、弟の死後、プロテスタントであったノーサンバランド公の反乱を鎮圧して、熱烈な支持の下、王位を継承したことが説明さ

れる。彼女の即位までの生涯を通じて、プロテスタントを火あぶりにし、「血まみれメアリー」と称されるにいたった主人公が、なぜそのようなことを行うにいたったのかの背景(プロテスタントを忌避するにいたる理由)を説明しているといえる。

そして、即位後は、即位時の人気に陰りが見受けられるようになった要因が、外国人(スペイン人)との婚姻、カトリックに対する火あぶり、敗戦と領土喪失の3つに分けて語られている。しかし、スペイン人との結婚にしてもしぶしぶであったことや、結婚よりも偽妊娠騒動の方が致命的であったこと、また火あぶりにしても、当時としては特別なことではなく他の国王も実施していたが、彼女の火あぶりを特に非難した著書が妹によって死後も広く読むよう推奨されたこと、敗戦にしても夫のために巻き込まれてしまったという側面が強かったことが説明される。すなわち、人気低下の要因の説明をしているが、個人の問題というより周囲の状況によるもので、それを理由に彼女を非難するのは忍びないと思わせる構成になっている。

このように、第2の部分では、まず、プロテスタントを忌避するに足る事情を説明し、その上で、嫌われる要因を擁護しながら説明しているため、常識的な一般的イメージ(「血まみれメアリー」)を覆すような事実を提示している部分といえるだろう。この第2の部分(特に後半部分)を要約したものが第3の部分で、小単元「私が死んで敗北したら…」が該当する。

以上のことから、常識的な一般的イメージ(「血まみれメアリー」)を覆すような事実を提示し、異なる評価(解釈)をする構成、常識的見方に反しメアリーI世を擁護するような別の見方に対する共感を行う構成、となっているとまとめられるだろう。

表1 『血まみれメアリー：残虐な女王か敬虔なカトリックか?』の単元構成

単元名		主な学習内容	学習の構造			
導入		1558年11月17日、女王メアリーの死去と当時の人々がそれを祝ったこと 死去の日が、それ以降200年間、国民の祝日とされるほど嫌われていたこと 問題提起:なぜ、死を祝われ、「血まみれメアリー」と評されるほど嫌われたのか、考えてみてほしい	問題提起 常識的見方の提起			
概観:王位の継承者		当時の王位継承ルール(男子→女子→弟→姉妹) 男子優先の軍事的・宗教的根拠 王位継承をめぐる争い、特に女子が継承した場合、内紛もしばしばあったこと	薄幸の幼少時代(プロテスタント勢力による自分たちへの残酷な仕打ち)	プロテスタントの忌避とその要因	復権と王家のプロテスタント化による改宗の強制	個人の従来のイメージの検討と再評価
非嫡出の姫	男子をなすことの重要性	スペインの姫である母キャサリンの出自 ヘンリーⅧ世の兄アーサーとの最初の政略結婚 アーサーの死後、デューダー家とのつながりが切れることを危惧し、教会法違反を承知で、その弟ヘンリーと二度目の政略結婚を強いられたこと				
	赤ん坊たちの死	長女の死産、長男の早世、二男の早世、次女の死産 5度目の妊娠と三女メアリーの出生				
	ヘンリー、結婚を後悔する	6度目の妊娠と四女の早世 不幸続きにより兄嫁とのこの結婚、およびメアリーの王女としての正当性に対して、父が不信を持つようになったこと				
	アン・ブーリン	父ヘンリーの相次ぐ浮気 自身の古くからの友人の娘、アン・ブーリンを見初め、彼女と再婚するためにキャサリンとの離婚を決意したこと				
	離婚	法王にキャサリンとの結婚の無効を申し立てたが、認められなかったこと 王妃と別居し、アンと暮らし始め、アンの妊娠に伴い、ひそかに結婚式を行ったこと 式を執り行ったカンタベリー大司教、トマス・克蘭マーが、王妃との婚姻の無効を承認したこと				
	死へといざなう二つの誓い	1534年、アンの子どもを王位継承者と認める王位継承法とイングランドの教会の長が法王ではなくヘンリーⅧ世にあることを定めた国王至上法が国会で承認されたことを受け、メアリーが命の危険にさらされたこと それら法律への不承認の姿勢を貫き、死を覚悟したこと				
	もはや姫ではない	命こそ奪われなかったが、王女としての権限をはく奪され、召使の多くは解雇、母との面会も制限され、手当もカット、粗末な部屋での生活を強いられたこと				
	さらなる出産と斬首	エリザベスの誕生と次子の流産 アン・ブーリンとの婚姻関係の破綻 不義の疑いでアン・ブーリンを斬首し、ジェーン・シーモアと三度目の結婚				
	メアリーの復権	アン・ブーリンの死後、王位継承法と国王至上法に承認の意思を示したメアリーは許され、王女としてではないが長子として丁重に遇されるようになったこと ジェーン・シーモアが待望の王子エドワードを出生したこと				
概観:カトリックとプロテスタント		信仰の中心としての法王という存在とカトリック プロテスタントの誕生と16世紀の宗教改革 両者の宗教儀式を表した絵(ミサと聖餐)とその違い(装飾の華美さと質素さ、ステンドグラスの有無、十字架、ワインとパンの意味、聖職者の衣服)	プロテスタントは人勢力があつた鎮圧による	常識的見方を覆す事実		
少年王	結婚を繰り返すも出産なし	4番目の妻アン・オブ・クレープスとのすぐの離婚 5番目の妻キャサリン・ハワードは処女でなかったことに腹を立て、処刑 6番目の妻キャサリン・パーとの婚姻時には、ヘンリーⅧ世はすでに52歳で、とても妊娠させられるだけの体調になかったこと				
	王の意思	王位継承法を改正し、エドワードの早世時の継承順位を1位メアリー、2位エリザベスと定めたこと				
	少年王とその庇護者	ヘンリーⅧ世の死去とエドワードⅥ世の9歳での即位 サマセット公(護国卿、エドワードの母方のおじ)による実権の把握とノーサンバランド公による篡奪 三者統治期のイングランドのプロテスタント化と礼拝統一法				
	メアリーは法を無視した	弟エドワードからの度重なる要求にもかかわらず、礼拝統一法を無視し、ミサ(カトリックの礼拝)を執り行い続けたメアリー エドワードⅥ世の死				
	ノーサンバランド公の不愉快な反乱	メアリーが王位に就くことでプロテスタントでもある自身の立場が危うくなることを恐れ、ジェーン・グレイ(エドワードⅧ世の妹メアリーの孫)と自身の息子とを結婚させ、本来は継承順位の低い彼女を、優先的に王位につかせようと画策したこと				
	新しい意思—そして畏	エドワードⅥ世は、その画策に同意し、ジェーンに王位を継承することを承認したこと ノーサンバランド公は、メアリーの捕縛を試みたが寸前でメアリーはノーフォークに逃れ、信書を重要人物らにおくり、自身の命令に従う味方となるよう求めたこと				
	女王ジェーンか女王メアリーか	枢密院はメアリーの信書を無視し、ジェーンを女王と認め、戴冠式の準備を始めたこと ノーサンバランド公は、メアリーを討伐のため2,000の兵を率いて向かったこと 他方メアリーは、自身に共鳴した15000の義勇兵とともに、ノーサンバランド公と対峙したこと				
	ノーサンバランド公の降伏	ノーサンバランド公を打ち破ったメアリーは、ロンドンに戻り、女王となったこと 女王ジェーンらは捉えられ、ロンドン塔におくられたこと 民衆は彼女の王位継承を熱烈に支持し、大いに祝ったこと 即位直後から人気のあった統治者は、これまでになかったこと				
	まさに女性のように	1553年7月、メアリー女王即位 毎日朝早くから夜遅くまで、寝食を忘れ公務に没頭したこと カトリック教徒としても熱心に信仰に励んだこと 女性が王位を継承することをよしとしなかった当時の風潮、メアリーの威厳のない容姿と病弱さ、反逆者に対してさえ当時の極刑に処さない甘さ、などのため、メアリーは概して家臣たちから評判がよくなかったこと				

中学校における歴史人物学習の可能性

スペイン人との結婚	夫を求めて	家臣たちは、女王を補佐し政治を安定へと導く人物を確保するために、37歳の女王自身は、自らの跡継ぎを生みプロテスタントである妹に王位を継承させないために、結婚相手を探したこと	失敗①外国人との結婚	人気の陰りの要因とその再評価	の提示  (常識的見方に反する共感)
	結婚の申し出	神聖ローマ皇帝カールⅤ世より、その子王太子フェリペ(26)との婚姻の申し出があったこと フランスと敵対関係にあったカール5世は、イングランドの女王と婚姻を結ぶことで、フランスとの戦いを優位にしたいとの思惑があったこと 年齢差は気になったが、強国の申し出をむげにすることもできず、婚姻によってイングランドがより強国になれるとの打算もあり、婚姻が成立したこと			
	雪つぶて	外国人であることに加え、スペインによって、イングランドが戦争に巻き込まれるのではといった危惧から、国民のほとんどはこの婚姻に反対で、スペインの使節団が婚姻の準備のためにロンドンに来た時などには、いった民衆が、使節団に雪つぶてを投げつけさせたこと			
	ワイアットの蜂起	スペイン王太子との婚姻に対する強い忌避感からメアリーに対する反乱蜂起へといたったこと 反乱を率いたのは、ケントのトーマス・ワイアット、彼の要求は、メアリーの退位とエリザベスへの譲位、エリザベスのイングランド人との婚姻			
	寛大さの終わり	反乱軍及びその首謀者へのメアリーの容赦ない仕打ち 敵対勢力への慈悲など必要ないと、以前とらえて幽閉していたジェーンを夫もろとも斬首に処したこと 反乱分子に担ぎあげられただけのエリザベスをも危険視したが、彼女の人気の高さから斬首をあきらめ、ロンドン塔に幽閉するにとどめたこと			
	婚姻	1554年7月、結婚のために、多数の供や家臣を引き連れて、フェリペ入国 初対面ながらラテン語で会話し打ち解け、その5日後に結婚			
	イングランド人对スペイン人	フェリペは多くの供と多数の贈り物を持参して入国し、イングランドの風習に合わせようと努力したが、連れてきた供とイングランド人とのいさかいが頻発したこと もし、メアリー懐妊の予兆、という知らせを聞かなければ、さながら戦争のような状況にすら陥っていたこと			
	メアリー、カトリックに戻す	妊娠の兆候によりプロテスタントの妹への王位継承の可能性が減じたこともあって、カトリック化を推し進めたこと ミサへの出席を義務付ける法および異端排斥法の制定、国王至上法の破棄、プロテスタントの国外追放などを断行したこと			
概観：異端と異端者		異端審問の方法 刑罰としての火あぶりの方法と問題点 火あぶりの根拠としてのヨハネの福音書	失敗②カトリック化と火あぶり		
異端者の火あぶり	ジョン・フーパーの残酷な死	1555年2月のジョン・フーパーの処刑の詳細(薪がしけていた、強風でなかなか燃えなかった等) 彼を皮切りに、その後の4年間で283名もの人々を異端者として火あぶりにしたこと			
	異端者か殉教者か	見せしめとしての当時の処刑 一般的な処刑(絞首刑)とは異なり、火あぶりの残虐性のため、信仰に殉じた者として異端者を哀悼し、たたえる風潮が生まれたこと それを実行したメアリーを「血まみれメアリー」と揶揄するようになっていったこと			
	比較考察	メアリーの処刑数は当時の常識からいえば、取り立てて多いということではなく、火あぶりという処刑方法も珍しくはなかったこと(父や義父、夫もおこなったこと)			
	殉教者についてのフォックスの著書	メアリーだけが後世まで悪評が高い理由としてのフォックスの著書の存在 同書の中に、メアリーによる火あぶりの章が記述されていること エリザベスがその本を国内のすべての教会におくことを命じたこと 200年後も安価で販売され続けたこと			
	赤ん坊誕生への期待 一妊娠していなかった	メアリーの評判を貶めた妊娠・出産の誤報 資料は残っていないが、腹部に腫瘍があり妊娠と誤解されたとか、流産したとか、諸説あり いずれにしろ民衆の期待を裏切ったこと、それが火あぶりに対する神からの罰とうわさされたことなどで、メアリーの評判が悪くなったこと			
	大雨、飢饉、はやり病 メアリーによる慈悲と慈善	メアリーの評判を貶めた天災(大雨、日照不足、収穫不良、飢饉、はやり病)の数々 飢饉や病気による死者が5人に1人の割合にのぼったこと 天災に対して慰問に訪れたり、私財を寄付したり、患者の看病をしったりしたが、法律を作り救済に乗り出すといった国家規模のものではなかったこと			
	戦時中のメアリー	新しい隣人と敵			
サン・クエンティンでの勝利		開戦当初は英西軍の優勢で、1557年10月10日サン・クエンティンでも勝利したこと 本来戦勝は、不人気の支配者の人気を高めることに貢献するはずだが、メアリーは戦費調達のため、戦時国債の強制購入を実行したため、人気は低いままだったこと			
カレーでの敗北		1557年12月31日、大陸に有していた最後の領土カレーでの籠城戦が始まり、イングランドが敗北したこと 敗北を非難し、ますますメアリーの評判は悪くなっていったこと			
私が死んで解剖したら・・・		メアリーに降りかかった不幸①妊娠できず、妹に王位を譲ったこと②度重なる火あぶりによってカトリック教徒からも信頼されなくなったこと③彼女を非難する著作やチラシが数多く作成されたこと④カレーを失ったこと、のために実態以上に非難されていること 1558年11月17日、メアリー死去、妹は膝を叩いて喜んだという			
決めましょう一残虐な女王が良きカトリックか		これまでの学習をもとに、 ①歴史の展示物の製作者だったら、メアリーが血まみれメアリーと評される理由をどのように説明しますか。 ②自分がカトリックの神学校の教員であると仮定し、メアリーを擁護する説明をおこないなさい。 ③メアリーは残虐な女王でしょうか。あなたの意見を説明しなさい。	問題解決		

Brooman, Josh, *Bloody Mary: Cruel Queen or Good Catholic?*, Longman, 2003.より筆者訳出、作成。  
表中の「単元名」は訳出した部分、それ以外は筆者の分析による。



表2 「歴史的評価」シリーズの人物選択基準

教科書名	人物の特性	人物選択基準	
トーマス・ベケット 聖人かそれともトラブルメーカーか？	教会の自由を求めて当時の王ヘンリーⅡ世と対立し、暗殺された12世紀の聖人（カンタベリー大司教）	必要以上 に一面的イメ ージ（解釈） が先行して いる人物 Ⅱ 再評価が 必要な人物	自国の二面性 を持つ人物（ 限らない） （実在する とは
ロビン・フッド 優れた無法者？	ジョン王の悪政に抵抗したとされる盗賊、12～13世紀の伝説上の人物		
ブラッディーメアリー 残虐な女王かそれとも敬虔なカトリックか？	カトリックを擁護し、プロテスタントを虐殺した16世紀イングランドの女王		
いとしのチャールズ皇子 英雄かそれとも不当な要求をする者か？	名誉革命によってイングランドを追われたジェームスⅡ世の孫、ジャコバイトによって支持された18世紀の王位請求者		
ヘイグ將軍 虐殺者か戦勝者か？	第1次世界大戦時のイギリス軍元帥、ドイツ軍への無謀な突撃命令を繰り返し、多数の戦死者を出す		
ウィンストン・チャーチル 世界を救った男？	第2次世界大戦時のイギリスの首相		

Brooman, Josh, *Bloody Mary: Cruel Queen or Good Catholic?*, Longman, 2003. などより筆者訳出, 作成. 表中の「教科書名」は訳出した部分, それ以外は筆者の分析による.

## (2)人物選択基準—再評価が必要な自国の二面性を持つ人物—

では、本シリーズでは、全体としてどのような人物が学習対象として取り上げられているのだろうか。本シリーズで取り上げられている人物の一覧をもとに、その人物選択基準を分析したものを表2として作成した。表中の「教科書名」は訳出により、それ以外は筆者の分析による。以下、表2に基づき考察を行う。

表2より、本シリーズでは全部で6人の人物が取り上げられているが、その共通点は何か。まず、いずれも、英国史上の人物であることが指摘できる。また、題目にAかBかといった副題がついていることから、立場の違いによって異なる評判のある人物（二面性を有する人物）ということも指摘できよう。ただし、ロビン・フッドが含まれていることから、必ずしも実在の人物である必要はないといえる。

その上で、本シリーズが(1)でまとめたように、個人を擁護し再評価する学習となっているのであるから、その対象である6人も、特に近年、再評価が必要と思われるようになってきた人物、言い換えるなら、それがいいか悪いかは関係なく（標題において最初に出てくる方が一般的イメージであり、悪いイメージの再評価が2人、いいイメージの再評価が4人となっている）、現在でも必要以上に一面的イメージ（解釈）が先行している人物、というのが本シリーズの人物選択基準といえるのではないだろうか。

以上のように本シリーズでは、現在でも必要以上に一面的イメージ（解釈）が先行している、再評価の必要な自国の二面性を有する人物を取り上げ、従来のイメージを覆し常識的見方に反する共感を行わせる学習となっていた。自国の人物であるからある程度認知しており、この学習で新しく得られた知見は、自身のこれまでの認識とは異なるものといえる。そのため、こうした人物再評価学習と定義すべき学習を通して、認識の可変性、およびその結果として認識の多元性という認識を形成させよう学習といえよう。

## Ⅲ. 人物再評価学習としての歴史授業開発—「徳川綱吉：犬公方か文治政治推進者か」—

### (1)授業開発の要点

前章での分析を踏まえ、授業開発を行う。「歴史的評価」シリーズにおいて特長的だったのは、人物選択基準より、①必要以上に一面的イメージ（解釈）が先行している、再評価の可能な二面性を有する人物を取り上げていること、②学習者がすでにある程度の認識を有して対象であることが望ましく、その意味で自国の人物が望ましいこと（ただし実在の人物である必要はない）、の2点、その学習構造より、③従来のイメージを覆し常識的見方に反する共感を行わせる学習を行うこと、④その結果として異なる

解釈が学習者の中で形成され、認識は可変であること、およびその結果として認識は多元となることを自覚する学習となっていること、の4点にまとめられるのではないだろうか。

そのため、授業を開発するにあたり、①②を踏まえ、犬公方としての暗愚な側面にばかり注目され、近年、歴史学の分野において、再評価がなされつつある<sup>6)</sup> 徳川綱吉を取り上げることとした。中学校段階の生徒を対象として徳川綱吉を扱った授業例としては、河原のもの<sup>7)</sup> が確認できたが、綱吉個人ではなく、綱吉の政策としての生類憐みの令やそれに民衆がどのように対応したかについて着目したもので、中学校段階において、人物再評価学習を目的としたようなものは、管見の限り存在しない。

また、人物再評価学習としての歴史人物学習を組織するべく、教科書記述が従来のイメージに基づくもの<sup>8)</sup> であることから、その記述を疑うことで常識的見方に反する共感を行わせる学習を行うことを意識した。詳細は次項に記す。

## (2)開発した授業の概要

次頁に、開発した小单元「徳川綱吉：犬公方か文治政治推進者か」を示す。本小单元の目標は、徳川綱吉を取り上げ、①その人物は一般的に評価が低いこと、その理由として生類憐みの令があること、②いわゆる生類憐みの令の公布は、すべての生類に対する愛護の精神や社会的風習の浸透（儒教に基づく

文治主義政治の実現）を目的としたものであること、③現在の犬公方のような一面的イメージの形成には、後の時代の意図的な解釈とその一人歩きによるものであること、④意図を持った解釈によって、歴史は可変であり多元となることを自覚すること、である。

本小单元は、導入、展開Ⅰ、Ⅱ、終結の大きく4つの部分から構成されている。導入では、教科書記述を紹介し、綱吉の一般的イメージを確認した上で、なぜそのようなことをしたのかと問うことで、問題提起を行っている。続く展開Ⅰでは、儒教に基づく政治（仁や礼）を志した綱吉の人となりについて、基本的な情報を提示した上で、その人物像と、生類憐みの令における人よりも犬の愛護という従来の説明とに矛盾がないかと問い、生類憐みの令が、極端な動物愛護法ではなく、価値観（意識）の変容の強制を目的としたものであったことを、仮説を立て考察している。そして展開Ⅱでは、生類憐みの令自体が、価値観の変容の強制という非常に無理のある法令だったため、その目的実現のため、細かな法令をいくつも公布し、その行動を過度に監督・規制したため、後代の人物や同時代の人物に酷評されたこと、また、同時代の他の人物をより高く評価するために、相対的に低く評価される傾向にあったこと、そしてその結果として非常に低い現代的評価が定着していることを確認している。そして最後に終結では、これまでの分析を踏まえ、徳川綱吉を再評価することを求めている。

### 1. 小单元名「徳川綱吉：犬公方か文治政治推進者か」

### 2. 小单元の目標

知識・理解

①徳川綱吉について次のことを理解する。

- i) 一般的には犬公方として、評価が低いこと
- ii) 学問（儒教）に明るく、尊王心が厚かったとされること
- iii) 生類憐みの令をはじめ、民衆の日常生活にまで、規制をかけようとしたこと

②徳川綱吉の政策（生類憐みの令）に対する異なる評価（解釈）を具体的に理解する。

- i) 生類憐みの令は、すべての生物に対する愛護を目的とした複数の法令の総称で、決して人よりも犬を大事にしたものではないこと
- ii) 生類憐みの令は、武断政治を否定し、文治主義的政治を推し進めることを意図していたこと
- iii) 法令を発するという事は、それが弊害として存在していたためであることを意識し、犬を大事にしたのは、それだけ犬の害があったからということに逆説的に気づくこと

iv) i) のような誤解が生じたのは、新井白石など後代の人物による、意図的な著作によるところが大きいこと

思考・判断・表現・技能

①歴史の解釈は可変であり、結果として多元となりうることを自覚し、解釈を構築できる

②資料読解において、資料作成者には意図があることを自覚し、意図を意識しながら読むことができる

③ある歴史上の人物に関する評価（同時代的、現代的を問わず）は、他の人物との比較によって、意図的に形成されることもあることを自覚し、評価をうのみにしない

### 3. 小単元の展開

パート		教師の指示・発問	教授・学習過程	資料	習得させたい知識
導入 常識的見方の確認と問題提起		徳川綱吉という人物を知っているか？   綱吉は、本当に、自らの子をなすために、人よりも犬を大事にするような人物だったのだろうか？ それとも、何か事情があったのだろうか？ 綱吉について見ていこう。	T:質問する S:答える   T:説明する  T:質問する S:答えは求めない	①	徳川幕府第5代将軍 生類憐みの令 犬公方というあだ名 教科書記述「綱吉は、世継ぎにめぐまれないのは前世で殺生をした報いだといわれて、生類憐みの令を出したんだ。これは極端な動物愛護例で、なかでも犬を大事にしたのは、綱吉が成年生まれだったからだよ」 生類憐みの令は、当時の人々から不評で、綱吉の死後、すぐにその一部が廃止されたこと。
展開Ⅰ 生類憐みの令と綱吉	展開Ⅰ－1 徳川綱吉とはいかなる人物か	どのような人物か？ その出自や施政も含めて、簡潔に確認しよう。	T:資料配布 T:説明する	②	1646年、3代将軍家光の四男として生まれる。幼いころから儒教に基づく教育を熱心に施され、元服ののち館林藩（現在の群馬県）の藩主として25万石を拝領。4代将軍家綱に男子がなく、次男、三男はすでに他界していたため、1680年に長男の養嗣子となり、同年5代将軍となる。 自身の将軍就任の後押しをした堀田正俊、その死後は側用人牧野成貞や柳沢吉保らを重用。 治世の前半は、善政(天和の治)として名高く、諸藩の政治を監査するなど積極的な政治に乗り出したり、有能な小身旗本の登用もおこなった。 治世の後半は、生類憐みの令や萩原重秀の献策による貨幣の改鑄とその結果としての経済の混乱などのため、悪政と評される。
		どのような将軍だったのか？その施策の特徴は何か？	T:質問する S:答える  T:質問する S:答える	③	大変学問好きな将軍(文治政治) 林家の登用 幕臣への儒教の講義(四書など) 湯島聖堂の整備
		なぜ、このような政治を行うような人物になったのか？	T:説明する	④	歴代将軍の中でも最も尊皇心が厚かったとされる将軍 皇室額の増額 御陵の修復 赤穂藩主浅野長矩の即日切腹(朝廷との儀式を台無しにされたことによる報復が原因ともいわれる)
	展開Ⅰ－2 生類憐みの令の再考	どうやら綱吉は、学問に熱心で、儒教に基づく政治を志向したようである。では、儒教とはそもそもどのような思想体系か？  仁を重視する儒教に熱心だった綱吉が、人よりも犬を大事にしたということに違和感を感じないか？ 仮説を立て、生類憐みの令について考えよう。  そもそも生類憐みの令とは何か？ 資料を読み、その内容を確認しよう。  つまりどういう法令か？	T:説明する  T:質問する S:答えは求めない  T:資料配布 S:資料読解  T:質問する S:答える T:説明する	⑤   <	

中学校における歴史人物学習の可能性

	展開Ⅰ－3 なぜ、このような法令を出したのか	なぜ、130もの法令を出したのか？	T:質問する S:答える	⑨	(例) そのくらいしないと、法令の趣旨が守られなかったから。 それほど、法令の趣旨を徹底したいと強く考えたから。
		当時の状況はどのようなものだったと推察されるか？	T:説明する		ある禁止命令が出るということは、それが一般的だったということ。 つまり、法令を逆読みすると、重病人の遺棄や捨て子、鳥類・畜類などへの虐待などが横行していたということになる。
		なぜそのような状況だったのか？	T:資料配布 T:説明する		江戸時代の前は戦国時代。 戦乱が頻発して荒廃しており、下剋上によって実力(武力など)のあるものだけがのし上がる(自力救済)のが通常。その名残があったから。 武断政治
		法令の趣旨とはいかなるものか？	T:説明する		武断政治から文治政治への脱却。 意識改革としての博愛思想と生き物の愛護。
		ならば、なぜ犬が重視されたのか？	T:資料配布 S:資料読解 S:答える	⑩⑪	上記法令以外に、大規模な中野犬屋敷を整備したりと、犬に関する法令も多かったこと。 同様に法令を逆読みすると、野犬が多数いたこと、そしてそれが何らかの障害や問題(狂犬病など野犬による家畜や人への被害など)を生んでいたことになる。そのため、隔離のための犬屋敷が必要だったのではない。 公衆衛生としての野良犬の隔離、公共事業としての犬小屋の設営
展開Ⅱ 綱吉の再評価	展開Ⅱ－1 綱吉の同時代的評価	ならばなぜ人気がないのか？予想を立ててみよう。	T:質問する S:考える、予想する		(例) i) 先ほどの(2)(綱吉の意図を無視した運用による過度の取締りなど)があり、綱吉を批判的にとらえる風潮があったのではないか ii) 後世の著作において、過度に否定的に描かれたのではないか
		i) を検証しよう。	T:資料配布 S:資料読解		『折たく柴の記』よりの引用文 此年比、此事によりて罪かうぶれるもの、何十万といふ数を知らず。 『御当代記』よりの引用文 お犬様と恐れていること 蚤・虱・蚊・蠅すら殺さないように注意しなければならなかった
		それほどひどかったのか？	T:質問する S:答える T:反論する		資料だけ見るとやはり異常であると感じられるが、綱吉の施政中、史料などから確認できる実際の処罰例は69件。内、死罪は13件。多くが、最初のころに集中しており、処罰されたものも武士中心、ということ。
		どういうことか？	T:説明する		折たく柴の記を書いた新井白石は、次期将軍(6代家宣)の業績を誇張するために、あえて先代を酷評した形跡があること 御当代記を書いた戸田茂睡は、執筆時浪人中で、為政者(綱吉)に対し批判的な文章が目立つこと
	展開Ⅱ－2 綱吉の現代的評価	ii) を検証しよう。	T:説明する	⑫⑬  ⑭  ⑮	つまり、綱吉の意図は、あくまで犬などの生類を大事にする精神(意識)を涵養することであって、そのために見せしめとして武士を中心に罰したものであって、現在のような犬公方のイメージとはかけ離れていたこと また、確かに、綱吉の意図を超えて、厳しく罰することもあったようだが、それよりも、後の世で、はるかに異なるイメージが構築されていったこと
終結 決めましょう－犬公方が文治政治推進者か		徳川綱吉について、あなたの考えを説明しよう。	T:質問する S:考える S:相談・話し合い S:資料作成		『折たく柴の記』などに加えて、綱吉は、同時代のほかの有名な逸話の中で、悪役として描かれることが多い。 「赤穂浪士事件」において、主君を即刻切腹させたのは綱吉。 これとて、朝廷を重んじ、仁や礼を重視した政策をとっていた綱吉にとって、朝廷の使者を迎える大切な儀式の直前に、血の穢れ(刃傷沙汰)をもたらした浅野長矩は、絶対に罰すべき悪。 しかし、世間においては、『仮名手本忠臣蔵』のように、浅野長矩や大石内蔵助を善として描くため、吉良や綱吉は悪として描かれる。
					これまでの学習をもとに。 ①文化祭で歴史の授業の学習成果を展示することになりました。徳川綱吉に関して、どのような展示を構成しますか、またそれはなぜですか。 ②徳川綱吉は犬公方でしょうか。あなたの意見を説明しなさい。

資料

- 五味文彦ほか『新しい社会 歴史』東京書籍、2012年、p. 114.
- 井上光貞ほか編『日本歴史体系9 幕藩体制の成立と構造[下]』山川出版社、1996年、pp. 102－129.
- 同上、pp. 120－122.
- 同上、pp. 124－129.
- 塚本学『徳川綱吉』吉川弘文館、1998年、pp. 12－19.
- 石田一良『儒教』相賀徹夫編『日本大百科全書11』小学館、1986年、pp. 609－611.
- 「二二五六 貞享四卯年正月」高柳真三ほか編『御觸書寛保集成』岩波書店、1934年、pp. 1083－1084.
- 「1687(貞享4)年4月の生類憐みの令」【URL: <http://www2u.biglobe.ne.jp/~k-hina/awaremi.htm>】
- 高埜利彦『集英社版日本の歴史⑬ 元禄・享保の時代』集英社、1992年、pp. 130－136
- 前掲②、p. 123.
- 前掲⑨、pp. 138－142.
- 山室恭子『黄門さまと犬公方』文芸春秋、1998年、pp. 229－230.
- 同上、pp. 174－176.
- 同上、pp. 176－185.
- 前掲⑤、pp. 155－163.



#### IV. 結 語

本小論は、イギリスの歴史教科書の分析から得られた知見を手がかりに授業試案を構築することで、中学校の歴史教育において、歴史上の人物を扱う際の、小学校段階とはより明確に差異化された、新たな方略の可能性を論じるものであった。

研究の結果、人物再評価学習と定義できる、共感的理解を目指す人物学習と漸進的な特質を有する歴史学習の方略を具体的に明らかにすることができ、試案ではあるが、それを指導案「徳川綱吉：犬公方か文治政治推進者か」として、具体化できた。

歴史教育において歴史上の人物という教材を選択するという学習方略は、現在は小学校の歴史学習と深く結びついている。確かに、人物という歴史上の主体を取り上げることで、共感的に理解させることを教育目標とすることも可能である。しかし、歴史上の人物は教材でしかなく、教材をわからせるためではなく、社会科教育の目標である社会認識形成や市民的資質育成を実現するために意味がある学習方略が、歴史上の人物を取り上げることで実現可能なのであれば、小学校段階以外でも、積極的に取り上げる必要があるといえるのではないだろうか。本小論は、中学校段階における歴史人物学習の一つの在り方を、具体的に例示したに過ぎないが、こうした研究を積み重ねていくことで、社会科教育としての歴史のための歴史人物学習の、学校段階に応じた在り方がより明確化してくるものと考えられる。

そのための残された課題として、以下二つを指摘したい。一つは、今回の人物再評価学習以外の歴史人物学習の方略を具体的に明らかにすることである。今回事例とした教科書を含めて、イギリスの歴史教育においては、歴史上の人物を扱った教科書がほか

にも存在する<sup>9)</sup>。これらの分析を手がかりに、歴史上の人物の教材としての多様な可能性を吟味検討したい。

二つ目は、それらの分析を踏まえた、カリキュラム編成原理の解明と提案である。小学校と中学校と高等学校において、歴史人物学習を行う場合、どのように段階的に配列してカリキュラム編成すべきか、またそれはなぜか。学校段階に応じた、歴史人物学習のカリキュラム編成の在り方を模索する必要があるだろう。

#### 注

- 1) 拙稿「高等学校における歴史人物学習の可能性－教科書分析と授業開発を手がかりに－」『熊本大学教育学部紀要』第63号、2014年、pp. 23-32.
- 2) 文部科学省『小学校学習指導要領解説社会編』東洋館出版社、2008年、pp. 120-122.
- 3) 文部科学省『中学校学習指導要領解説社会編』日本文教出版、2008年、pp. 142-146.
- 4) 大江和彦「中学校社会科歴史的分野における人物学習の実践：北条政子と封建社会の成立」『中等教育研究紀要』第49号、2009年、pp. 205-216.
- 5) Brooman, Josh, *Bloody Mary: Cruel Queen or Good Catholic?*, Longman, 2003.
- 6) 塚本学『徳川綱吉』吉川弘文館、1998年、など.
- 7) 河原和之「『生類あわれみの令』は悪法か－徳川綱吉の政治－」歴史教育者協議会編『わかったのしい中学社会科歴史の授業』大月書店、2002年、pp. 136-139.
- 8) 五味文彦ほか『新しい社会 歴史』東京書籍、2012年、p. 114.
- 9) 例えば、Wayland社が出版した「The Who's Who of」シリーズなど.